

仙林寺だより

NO. 76
編集・発行
松田正貴

行事報告 ファイールドワーク



社会科見学といえばピンとくるのですが、今年はこの様に言うのだそうです。 桃陵中学校の一年生五クラスが十一月六日、九日にかけて仙林寺を訪れました。保原小学校出身者にはお馴染みの「適山・蘭齋画碑」、伊達政宗の客分としてその名を留めた剣豪「七宮信盛の碑」、そして「伊達の逆さ水」とその業績を称えられた伊達地方治水事業の立役者「渡邊新左衛門の墓所」を見学致しました。 今回のメインは何と言っても、渡邊新左衛門の偉業、保原町における田畑の分布をきっかけに、灌がい用水に興味を持ち、その水がここに至るまでを考えると過去の治水事業にたどり着きます。「良い流れで勉強が出来ます」と引率の引地先生も満足げな様子。水の流れを学ぶことで、過去から現在にわたり流れ続けている偉人の苦勞や業績が偲ばれます。

本来「授業」とは仏教用語で、ジユゴウと読みます。ワザを授けるといふ意味もありますが、人間の業（行い）、人が背負っている業とはいかなるものなのかを悟らせるのが授業の本来の意味です。地域の歴史を学び、過去の恩人に思いを致すことで感謝の念を新たに思い起こすものでしょう。そして、そこに今の自分の業（行い）を改めて見直す。「感謝努力反省是れ菩提心なり」と言いますが、本当の授業がそこにはあるような気がします。

猫川馬頭観世音祭礼 十一月三日
梅花県大会声合わせ

十一月十二日、仙林寺に於いて行われました。

福島県梅花流県大会 十一月二十日

パルセ飯坂にて開催されました。

第三教区檀信徒研修 十一月二十六日

常円寺・好国寺に於いて行われました。

朝日新聞取材

九月には河北新報の取材がありました。今回は全国紙の朝日新聞です。前回同様「取材はちよつと」と遠慮気味の裕好さんです。「お話だけでも」とのお電話に気を許したのが間違い？の元、茶飲み話で終わる事はなかったようです。ところで取材の記者さんはたまたま裕好さんと年が一緒、多少の違いはあっても辿ってきた生活の形や時代感覚は共通するところも多く、出家した動機や思いは伝わったものと私も感じておりましたが、しかしやはりそこには微妙なズレがあったことは否めません。人としての生き方、物ではなく正しい心こそが大切で、道行きに迷う方々へ一つの示唆を提案できればと思いで取材を受け入れた訳ですが、その真意が伝わったかどうかは甚だ疑問であります。裕好さん自身、特別な人、特別な生活をしている人と括られてしまつては何にもなりません。特別ではなくこれがむしろ自然な生き方なんだと思つていただけならお受けした甲斐があったというものでしょう。

変わった生き方ではないつもり（大越裕好）



新聞記事になるなんて言う事は、良くない事をしたときか、よほど変わった事をした時と長年思つていた。

（今も思つている）それは、北風の応援もあり、枯葉が境内をカシャカシャ・カリカリ・コトコトと楽しく舞い踊っている時に取材の電話が鳴った。電話の先は朝日新聞社の記者と名乗



られたので只ただ驚く。「何で？」という気持ちで頭の中をぐるぐる回り、悪い事？変わった事？どちらかと考えてみたが、どちらにも該当しない。「変わった生き方ではないので記事になる事では有りません」と断ると、「話だけでもしてみたい」との事で、結局来寺となった。何度話しても、仏道を目指した劇的な出来事は何も無いのだから、説明のしようも無い。自然に、時の流れと共に、気がついたら仏道に身を置いていたのが現実だから、どう考えても理由らしい理由は見あたらない。しいて言えば、本当のユタカさつてなんだろう？と考えた事がそれに該当するのかなと無理して理由を考えながら話をすると上手く言葉に出ない。（自分でも分からないのだから言葉にならないのは当然だし、聞いている方はもっと分からないだろうと思いつつ）・・・確かにこの間、科学も発達し物質も豊富になったのは事実。物が豊かになり様々なものを手に入れることが出来れば幸せになれると思つていたし、事実そうやってきた。しかし今では物が豊富になり、文明も発達してきたのに、心は本当に豊かになつてきたのだろうか？と考えざるを得ない状況におかれている

昨今。出家修行もまだ始まったばかりだが、身の回りの物が少なければ少ないなりに物にこだわる必要は無いし、心配も少なくなると言う事にあらためて気づかされた。今は、お釈迦様が説かれた「我欲」から離れる事とはこういうことなのかと勝手に思い込んでいる。ピンからキリまでと言う言葉が有るが、いつまでも物にこだわってばかりいてはキリが無いと思う。質素でも良い！そう思うと、その上に対するこだわりが大きくならないので、あれこれ考える必要もその分少ない、考える事も少ないから気持ちには楽になる。(多分) 新聞記事は、私の歩んでいる道が殊更変わった生き方を選んだような印象で書かれていなくもないので、ふとJARO(ジャロ)が頭の中をよぎった。でも、もう活字になってしまった事。仏道に身をゆだね、心豊かに生きたいと思う事がそんなに注目される事とは考えてもいない。今までもこれからは普通に生きていくことが伝わっている。これであれば止むを得ないとも思っている。これからも、大自然の中で与えられた命を大事にし普通に生き続けられたら・・・。

観音堂リフォーム



私は何を磨いたのか。(大越裕好) 九月中旬から始まった観音堂の修復に私もチョットお手伝い。驚いたのは、長年の風雪に耐えて来た観音堂の骨組にたくましさが残っていた事です。昭和8年の建造です。あちこちに多少の傷みが出るのは当たり前といえは当たり前です。修復作業を見ていた私もじつとしては居られず、会津柿渋販売福島総代理店のご指導を受けて：外壁等の「柿渋」塗りに挑戦させて頂きました。最初は野地板のだけと軽く考えて始めましたが、一箇所が綺麗になると他の所が気になり、結局手の届く所全部に挑戦する事となりました。これまでに多くの人を見守って来てくれた建材の汚れを、亀の子タワシで落とし、雑巾をかけ、仕上げに

は「柿渋」をそつと木目に乗せただけです。しかし、古ければ古い所ほど(適当に)重厚さが出る、あそこもここも手が伸びて、時間が過ぎるのも忘れ、塗り残しは無いかとひたすら木に向かうこととなりました。「時間が経てば経つほど良い色になるよ」との言葉に、自己満足しながらの作業でした。まだ時間はあまり経っていませんが、今では程よい色になって来ているから本当に不思議です。塗られた木肌は時間と共に渋い顔になってきました。よほど渋かったのでしょうか。渋柿も干し柿にして太陽の光を浴びると甘くなり食べられますが、今では渋い中にも少し甘い顔になって来た様に感じられます。恐るべし渋柿、たかが柿渋、されど柿渋。先人が生み出した智慧にただただ敬服するばかりです。今の観音堂は生き生きとした中にも、大変味のある個性的な良い顔になりました。如意輪観音様も二十五日に遷座し、これから雨の日でもはらはらする事も無く、今まで以上に慈悲の心で穏やかに微笑んで見守って下さる事と思います。修復を終えた観音堂を見るたび、私は建材を磨いたのではなく、「新しい物ばかりではなく、古い物でも磨けばまた別の美しさがある(出る)」と言う自分の感覚を磨いていたのかも知れません。

法句經

渴愛より

【法句經二百十六】

渴愛より

うれいは生じ

むさぼりより

おそれは生じん

むさぼりを

離れし人に

うれいなし

いずこにか

おそれあらん

また

【解説】偽装問題が後を絶ちません。しかも最近になって次々に明るみに出るのが創業してよ百年以上の老舗、誰もがその名を知る名店です。その店舗の佇まいはまさにその名に恥じぬ素晴らしい門構え、当主代々大切に受け継がれた努力の結晶なのでしょう。仏教に「知足」という言葉があります。まさに足るを知る。貪らず欲を出さずほどの心構えとも言え判り易いでしょうか、これに対して「もつ」との欲望を、炎天下の喉の渇きに例えて「渴愛」と言います。俗な例えで恐縮ですが、堀の高さで、住む人のお財布の中身が判るなどと言います。守る物が多くなればなるほど心配が増え、口止めや偽りの念書という自衛手段がより堀の高さを増したものでしょう。禅の言葉に「知足のものは貧しいえども富めり、不知足のものは富めりといえども貧し」とあります。心の満足度をどの物差しをもつて計るのか、限らない欲望の満足が幸福という世間の物差しで計る時、お財布の膨らみとは裏腹に心の方はすっかり疲弊してしまふものなのでしょう。またこの「知足」と対になる語句に「少欲」があります。お釈迦様のご遺言の中に「多欲の人は利を求むること多きが故に苦悩もまた多し、少欲の人は求め無く欲なければ則ち此の患いなし」とあります。「名刺付き合い」などと言いますが、名前よりも肩書きが一人歩きしたお付き合いには、職が外れた時の寂しさがあります。名譽、名声を求めるが故の多欲の人にもまた苦悩は付きものようです。貧しきがへつらわざるはあれども、富みて奢らざるはなし。仏教説話集『沙石集』にある一節です。欲が少なければへつらう必要も無く、奢る術も無い。名譽欲が多ければへつらう機会も多く、奢りもまた気になって参ります。「実るほど頭のたれる稲穂かな」。自然の目線というへつらいなく奢りのない物差しを大切に考えたいと思います